

家畜保健所における病性鑑定実施状況(令和3年度)

令和3年度に当所で実施した病性鑑定件数は、673件でした。畜種別内訳では、牛が447件と最も多く、ついでイノシシが129件(全て豚熱・アフリカ豚熱の全国的サーベイランス検査)、3番目に家きんが63件でした。

673件の内、85%(572件)は、サーベイランスやモニタリング検査と預託や導入に関連する検査で、15%(101件)は、死亡畜の病理解剖を伴う病性鑑定でした(表1)。

表1. 令和3年度 病性鑑定状況 (件数)

畜種	解剖	検査	合計
牛	89	358	447
馬	1	0	1
豚	2	8	10
家きん	2	61	63
山羊・羊	4	16	20
イノシシ	0	129	129
ミツバチ	3	0	3
合計	101	572	673

最も多い牛に関して品種別で見ると、検査は乳用種169件に対して肉用種が278件

と多く、解剖についても80%(71件)を肉用種が占めていました。(表2)

表2. 牛の品種別病性鑑定実施状況 (件数)

品種	解剖	検査	合計
乳用種	18	151	169
肉用種	71	207	278

検査目的については、導入や預託のための牛伝染性リンパ腫と牛ウイルス性下痢の検査が約8割を占めており、これらの疾病の侵入・まん延防止の取り組みが進んでいることが伺われます。牛の解剖を伴う病性鑑定の結果についてみると、消化器病が41%と最も多く、中でもクロストリジウム・パーフリンゲンス感染症が13件、鼓脹症が11件と多くを占めていました(図1)。そのほとんどは肥育中の肉用種が占めており、損耗防止対策としてワクチン接種や飼養管理の徹底が望まれます。

(三溝)

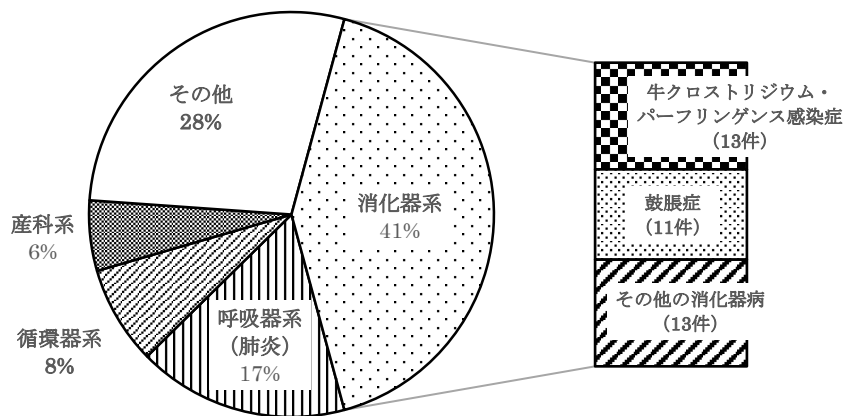


図1. 令和3年 牛の解剖を伴う病性鑑定結果